

慶應
太平

末代鑑

全

リ 5
2961





御制札之寫

六月廿一日新河右衛門被為 作出以月

徳川家天下に於て御用不附と察し一役迄其軍職

拜返る程の旨断然被 聞食既性之罪不被為

同列層層に上程も被 仰附と當道家も大坂城引取

肯(因)素滞滯を去る三日麾下に者を引乗し割向は

作附の會素名を先鋒とて 關下を率程に勢現は彼

より兵端を用い上り其及上明白始終を欺 朝廷

後又違道之罪を道以上於 朝廷御者怒り道會

後果不認得已御討討 仰附抑兵端既 忠告を以て

速に賊討滅殺すべし 昔を被為救度

觀慮する今敢に和寺官に討討軍 任は付かへ定由

偷其怠惰と并之我も其端を抱き或は賊討後居者

たりとも悔悟懐及國家に為る志と志を軍

寛大と思はる御採月を以て為在いむに付る方り 辨

大我賊徒を謀を懸下 或は藩居為致は者朝致は

松茂刑之罪を以る公治遠之に極て致は事

慶應二年正月



系朱雀野之礼

一德川慶友法下身之天守為敵以大兵林不明
此不可容天地大逆是可滅亡之道也

一系國之冠之神州大體ヲ破リ復外異ト親交ニ國ヲ
賣スル欺キ神明ノ怒ヲ受テ是滅亡ニツ也

一親遺志持テ先帝ヲ追テ改テ施方氏共是滅亡ニツ也

一家康奸謀ヲ以豊后氏ヲ滅亡ニ大波瀾ヲ己ガ物トス
慶友今自其城之捕獲者國ノ神靈怒テ是為罰

冬原氏山城之居テ亡滅ス德川亦此城ニ在テ滅ス天道ノ
令此所是其威スル也

一天保以味ノ事 傳燒ル事 數於去年正月日光
家康靈屋燒失ス是滅スル五ツナリ

一北條守時大逆無道朝敵成テ一族滅亡ス為其亡時
天狗田樂ヲ雜テ妖靈早ヲ歌テ其罪ヲ時ニ信

之ヲ以テ神符ヲ降レ諸物ヲ下ス遠近徳主ノ如
其數奇ク怪ク也天狗ノ所為ナル事 疑ハテ是

之威亡ノウツ也

一三至塞大將軍ノ方ニ列者ヲリ務利得テ是滅亡之
石運城其又其亡ニキ理テ善ニ帳ヲス今其大成ヲ舉テ

神明ノ御子心有者願運ヲ奉テ得後ノ理ヲ審ニ速ニ其
進退向背ヲ決テ者也

慶應元年正月

慶應四
戊辰春

泰平初多物終

初編

ろくまのりしおと統り紐重酒小碎つがき小戸の癖
とて火若引を後藤の夏もなぐりつて堂もなくは

長交長に奉成辰正月三日申の刻出で

なりとて速藤小川とつて狗を押

去り外面小川とつてうららんとて

伏水の方に過つて悪燻りなり

のかり風もなぐりふる内お二口

三口とわらうて大砲の音を頰りな

まばスハちまなると作はし忍び

鳴く内お禁闕は守湯のあ

の無き一物やうりく隊五礼とて

御多内つたるるやと向ひてまば惟任

將軍光秀がほ帳系内と虚飾して数万騎の

大軍とて川と新を結を謀りしお流り取ら

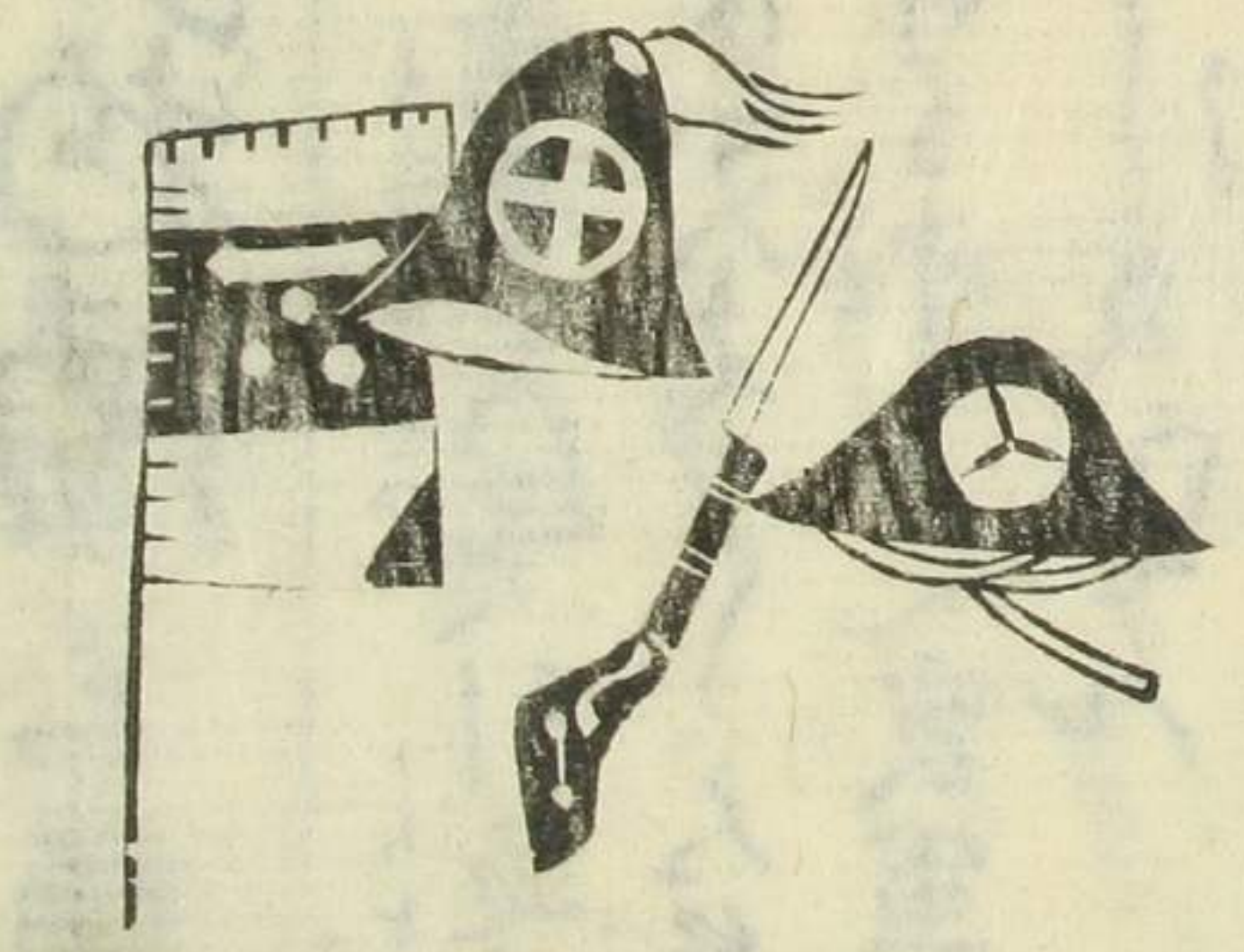
およひ羽は本秀の吉方の官軍あは兵庫の城

毛利九馬の輝元の内格をつて一巻を勒王とて



慶應四
 戊辰春 泰平初多物繪 貳編

勇兵三千余人結方てんぱに申まをに有羽うはの先陣せんじん
 名津毛利のあ辨あは今やおとしと待まちけりなり然しかん小
 光秀の先陣せんじん 素山越中松山判友等かみともら三万人に
 大軍小校せうがうを抄越上せうじやうを羽うはにて家いえをとる官
 軍ハ徳とくと味方あまの勢いきを家いえうけ埋ま伏ふく一いつ決けつて人ひと斗とて
 大軍と押おしとどめりとままば故兵こへい鴻津こうす勢いきの小勢せうなる
 と船ふねりり後炮ごほうおおけけ々々れればばもも者ものをを合あ合あ埋ま伏ふく
 ちちるる官軍くわんぐん一いつ日にちおお起おりり家法けふぽうよりより後ごちちりりととおお出い
 々々ままばば故勢こせきももひひががけけちちくく討うちち者ものありあり
 ばば及およびび小こななりりととええ入いりりるるはは時とき
 毛利勢まうりせき二三百人斗と街まち及およびびより
 西子の川中さいしよのかわなかつとと南みなみへへりり後ご死し
 本ほんじじへへ出い出い候こう合ありり敵てきのの唯ただ中ちゆうへ
 後炮ごほうおおけけ々々燃もゆゆりりのの下したより
 切きりり入い入い候こう母ははももろろふふ籠かご
 立たちちるる只ただ一いつ人ひと先せん



慶應四
戊辰春

泰平初多物録 三編

秀さんくく 小成くハ丁繩子城南うしろのやんと引返く
 然きとも故ハ大勢なるといふ新子を入るく 大旨
 小旨を折おとすや天地もさけり斗むしうりハ友軍
 馮津勢も大旨小旨を折おとすハ友とせん
 く我ふより然るふ山の方ハ遠りく
 馬控りらぐま色上りまやごよと
 清くとも頼りなきはるハ故勢

洛中ハ通りハと都の市
 中又も御夫ハ眼むの
 けりく 相あふハ赤
 せまうさぬにがたうくハ疾
 々くハ看候と務をさうり然るふ
 程くく燃りも落しうさうさハ物さで



おろくハ活るるお地ぞあうりたるハお火
 上系まき留山丁とぞ中なるおびきののよをさうく
 なる羽口の友軍攻にハしゆるまりしをえて先秀の

慶應四
戊辰春 泰平初多物語 四編

先陣 東山松山守 采紀

お川おスハ故勢ハ列をさるぞ

すめやりのどもとく新よと入

か〜攻々止バ流石猛勇の宿

軍も苦戦とぞ又へくるおく治

粟中光明寺に屯の毛利勢二百人

上野羽を核切く謀由難定の本林法

煙依〜〜つりりれが足をもるより東法より

敵兵の真中へ鉄炮を颯ひ打ちあらし出せばびど

玉つりもかく好泰始〜とぬきたをさる煙りの

下より切〜つりあを幸ひ切えより足をもる友

軍大返〜お討くが是バけらるる川〜たまらぶと故

兵討〜さるりの救〜是は太舟山守旗〜りの

槍長刀玉系を是の端あもなく打替〜下を羽

さ〜〜故をす友軍の息をもる是は攻立〜たれば

下を羽の民屋お火を放ち防を裁〜も終ある



慶應四
戊辰春

泰平初多物語

五編

いそ横大治も足^つを^も通^るより^のこ^のず^の安^のの^奥へと
 故^をも^と多^の津^毛利^のの^支勢^の常^と進^んび^とあ
 り^大月^山竹^少放^一燦^{りの}中^も切^くか^はる^の故^勢
 討^つと^も相^救あ^まを^を故^ら家^もふ^火を^放ち^し際^に
 納^をへ^り引^ふあ^らり^ける^が安^軍短^兵も^あら^ず逃^れた^り
 くる^も父^の納^所を^推く^流の^城を^故を^も相^又休^水の
 三月^申刻^光秀^勢お^流後^大極^言経^入了^事を
 先^陣と^して^押より^流が^の民^を火^を放^ち

家^内の^老若^男女^と逃^ひち^りし^もあ^らず
 漸^々と^逃れ^もり^夕飯^付ま^をい^ふ事^も
 是^にに^兎を^抱か^けお^もり^れば^速利^に
 さ^びく^をり^お表^の柱^もつ^とあ^らず
 破^れも^あら^ずに^げち^らる^が一
 ち^まの^町に^たま^をを^まま^に
 泥^難や^風を^まま^に脊^山
 有^ると^して^老人^山館^のま^を



慶應四
戊辰春

泰平初多物語

六編

引く可なりけりやうりの書 鉄炮のおもく 天地も
 震るるまうりしそまの叔 是れ先承りし山辺 和ふ所を
 未だうりたるを 浮浪人をうりし 是れ入道 是れ色羽
 某方の 函子の先陣 島津毛利の 支勢 以てこの
 某が火をうけ 後の方 おんご 此を切落し たるの
 此の 名れし たるの 逃るる 徳とす 浮浪人
 此の 討敵を 以て 勢ひ 以て 某の 島津毛利
 の 支勢 無敵し たるが 故勢 水と 進立
 ら 是れ 後と 疾く 行 たる 勢ある
 お 次勢 六右 人の 三抽の 支勢
 埋御し たる 島津 勢を 某
 某の 支方が 使 たる 討 小せん
 某の 支勢 某の 支勢 某の 支勢
 追討 某を 追討 某の 支勢 三抽 某
 お 某の 既 小後 某を 討んと する 討 毛利 勢
 是を 某の 某の 支勢 某の 支勢 某の 支勢



引く可なりけりやうりの書 鉄炮のおもく 天地も
 震るるまうりしそまの叔 是れ先承りし山辺 和ふ所を
 未だうりたるを 浮浪人をうりし 是れ入道 是れ色羽
 某方の 函子の先陣 島津毛利の 支勢 以てこの
 某が火をうけ 後の方 おんご 此を切落し たるの
 此の 名れし たるの 逃るる 徳とす 浮浪人
 此の 討敵を 以て 勢ひ 以て 某の 島津毛利
 の 支勢 無敵し たるが 故勢 水と 進立
 ら 是れ 後と 疾く 行 たる 勢ある
 お 次勢 六右 人の 三抽の 支勢
 埋御し たる 島津 勢を 某
 某の 支方が 使 たる 討 小せん
 某の 支勢 某の 支勢 某の 支勢
 追討 某を 追討 某の 支勢 三抽 某
 お 某の 既 小後 某を 討んと する 討 毛利 勢
 是を 某の 某の 支勢 某の 支勢 某の 支勢

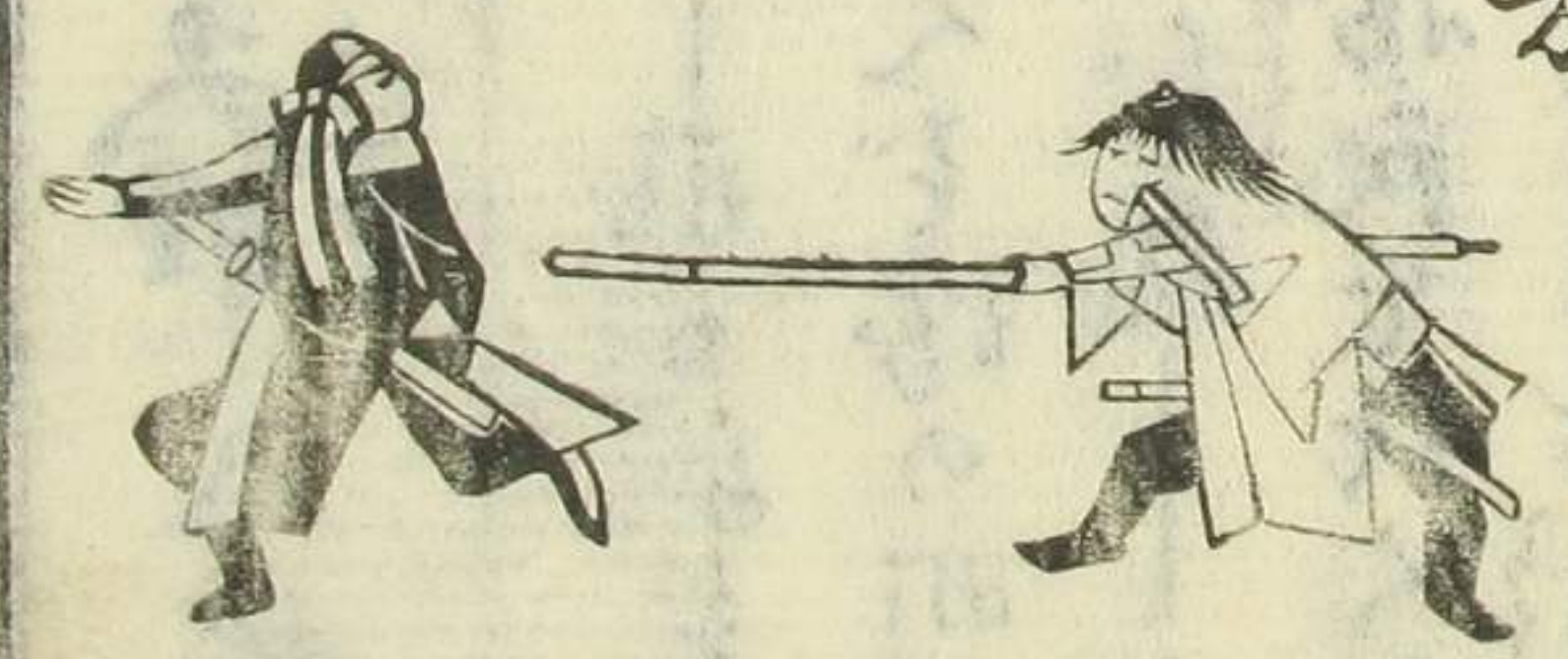
慶應四
戊辰春

泰平初多の物語

七編

けろけ煙けろけの下より切きくくききの忍しのちみぢぢんとりて
 はげたりりるはげりて支軍敵を逐おひ込こ攻
 立たてば渡の町つ火を附つけそのひまふはまこときほ
 ゆきまもまふ人ひとを火をまのりききびーびふせき橋
 中なへ敵をすきふあふたの毛利勢せい河川がわをさし
 攻立たてば橋はしわくしをまのり捕とりてにげりるふ
 南みなのふ余あふりりも毛利勢せい河川がわにたれが忍しのち

おろりてきんぐぐふ攻立たてば一いちちもさくず
 牧方まきかたして敵をす味方の軍ぐんを救きうふ
 狩かりりすくろふおおろりてにげきば逆も牧方
 けく防戦ぼうせんかゝらどと思おもひけん牧方ふ
 せをまのりちち敵てきくくに
 かりく大坂おおいさかへて敵てきはりが
 大坂城おおいさかじょうをも逆も防戦ぼうせんかま
 子こすくと懐なご病びやう風ふうおまを
 くれま逆もつぐりの



慶應四
戊辰春

泰平初冬物語 八編

小舟を泉州場へおちゆきて疾風も故勢の
追討をうとくくともものもせりゆへに場の町ふ
そを放ち煙ふまをんそ糸船一十國より
けけりたるあし一方の官軍へ捕執をけり
台捕生捕あびたしくよゆあひつんご進
をかう大なるは混雑の中にも水もあ
取方やあとの流矢の流るる民
朝廷よりそ人あは現来三斗りて
今式而之つとーおうと又を上に極絶の
のへを目をたされーくそあひのうらごにひさ
くくよらるびをそ後るなく時文小都道
和や浪むがさためーすくなき終初の中
ふ思ひやあのかの獲の日ふ増も車あがりたるあは
あのかをぞわりうとたをよらるるあまに眼を
たをりを見まが初冬の正なるじふも成書
あまーゆきをその日長ふみそらにしあ入とー

あまーゆきをその日長ふみそらにしあ入とー

豊后 大坂進状

初篇

今彼為行搦市正衆教中紙

以兩一為舌同心割物法浪人

為傳之用意甚公然中

先年秀摺為下知石田治

部や捕痛逐心より進此の序後

園東不移討日馳上法洲吉野

合戦切勝頗小國兩國より進

佛法軍勢逐中今加之生捕

石田治為安國寺小坂京新吉

家康會秘名に秘辱其刻り討

豊后 大坂進状 二篇

果一丸大筒報恩と故殊の縁
者一問助令立並ひし示還白
企孫故車一恸仰以介如履
立車一紙張一味穢網唐字
感湯官一雖為能所籍馬臺
及出陣一志良付端為別亦頼
首車一ふつ口煙候之と漢云

慶長十九年

大野主馬友

豊后 大坂返状 三篇

芳書令披見以所仰紙紙

題之柳之味一事

然之又在同秀頼及十之業

天下之相成之音曰在法大

名救通之起法又上之ふ

有終之抄如先年石田治

少補一之乃以又竟降天

下不運之ふ途今中其次國

之夫之足之沼以別秀頼送心

候承以何却少之知別心以併

豊後 大坂返状 四篇

家康表重頼侍前代末弟の

志同忘厚恩秀頼不宛

一々國成孤今又々討果

及足罪一國一休

後切事一弓箭

関白叶天道正理佛神三宝

納父多志家康父子

先志也程約一戦

慶長十九年 秀頼

くせふが 恒成 へいせい

又方恒成を京とけらぬことらるる
ふのこ人はせきしこしらやくらわ
系して東国へうつし伏見へ入る
神の山は旗とまきの玉印し
つらぬと一まんしつる海軍の
は城にのりしつる女軍の
とつりてはしつるぬらう東
まはつらぬわあまあつら
まらくまらつしぬらう
そとあやゆらうあまら
せぬらのらぬはたぬら
あまらぬらやらぬら
あつら長様とけん

阿保陀羅經

前編

佛説あほごら經あそまなごら別後く
 ほとりのかひるゑまらま和尙が法じりげ
 非お經の文句が何がゆごなり非なるら
 此の法又思初の正月三日のゆごら案のこ
 吐に逆座しつたこんがらつたまの丸やまして
 中。大蛇のどたのどらさうへりて怖じらるら
 喚きあふらるらさうすうをのを夜明けぬら
 市中の發動報仁の文出す子蛇へ返出す猫め
 の死出すのわおお出す仲士の考を年終結する
 ぬら。發動の中らるぬの死む又く小隊
 すめかんとがらまのたことこくして上
 海りして世にいふたまらあおの救うらほら
 凌つてゆふ法をうむまらふをうてしんら

阿保陀羅經

後編

佛見う。多羽作く。亦を牧方望ま。たのこの後教
 係小う。切。友堂大施に。こまて打負法
 軍いさんぐ。お鹿が殺る。お殺を厚して
 斗鴨ふ。あまのく。なんふ殺つ。殺兵を求む。
 傍りせ。乃終て。迎受早く。中うく。引上治せ
 度つ。城ふもたまら。兵殺用。金士乗も
 持。並。夜に。げと。出。ひ。け。洗。ひ。曠。く。産
 の。帷。子。長。洲。結。と。ま。ら。も。強。を。洗。滌。あ。ら
 福。痛。つ。煙。門。さ。ら。を。失。ひ。つ。道。は。法。法。く
 流。し。て。中。ま。て。こ。わ。ま。て。乃。終。の。ま。ら。も。賊。死。せ
 美。名。の。末。世。の。後。ま。で。す。ら。げ。ん。せ。お。ぞ。ん
 ち。く。川。先。祖。代。く。草。葉。の。う。げ。う。ら
 ち。う。く。の。こ。ら。な。く。お。ま。ま。の。し。く。

